

こんなん しています。

わだいのこじん

和歌山大空襲

昭和20年7月9日深夜、米軍は、和歌山市民の頭上に無差別じゅうたん爆撃を開始しました。焼夷（しょうえい）弾は火災を起こして町を焼き尽くす爆弾で、火の雨のように空から無数に落下。木と紙でできた日本家屋は一瞬のうちに燃え上がり、炎の渦の中を人々は逃げ惑いました。爆撃は10日未明まで続き、この数時間で和歌山市中心部は一面の焼け野原となり、千数百人が死亡。市民は今も深い慰霊を続けています。

当時、和歌山市内には29

の小学校がありました。そのうち12校（始成、内町東、内町西、宇治、番丁、湊南（そうなん）、雄（おの）、新北、大新、新南、広瀬、広南）の各学校が大空襲の一夜でほぼ跡形もなく消失。これを期に廃校となり、新たに6つの国民学校に統合されました。消失した学校について、昭和20年5月の在学児童数と昭和21年4月の在学児童数の記録があります。数字は各校の合計児童数です。

始成、内町東1050人
↓271人、内町西、宇治
番丁1445人↓245人、湊南、雄1679人↓469人、新北、大新13

戦争と子ども

80人↓347人、広瀬、広南1347人↓385人。戦災後の児童の激減が痛ましく胸を打ちます。

青空学校からの再建

驚くのは空襲直後から子どもたちも先生も小学校に集まり、授業が再開されたことです。とはいっても学校は焼けてしまい姿形もありません。

新南小学校の先生や父



始成小学校と内町東小学校が統合し本町小学校となった

兄は、焼け跡から資材を集め校門近くにわずか6坪のバラック小屋を建て、この小屋を拠点に学校再建に奔走しています。始成小学校は、明治6年に県内で最初に創立した由緒ある小学校で、現在の本町小学校の前身です。跡形もなく焼けましたが、焼けただけたコンクリート塀を黒板に、焼けた校舎の炭をチョークに、青空学校を始めました。子どもたちは拾ってきた焼けたレンガや石を積み重ね椅子にしたそうです。やがて冬が来て、野外教室はつらく、他所への間借りも肩身が狭く、学校再建は悲願となり、先生、子ども、父兄総出で、空腹に耐

え、手足から血を流しながら石を拾い廃物を埋め、校地整備に奮闘。新校舎設立式には校長はじめ児童も感極まり涙した、と校史は伝えています。また、内町東小学校では借りた仮校舎に入るやいなや、進駐軍から即刻立ち退きを命じられ児童が離散。児童も校舎もない小学校になってしまいました。また、行く当

てのない子のため先生が自転車を駆って、子どもの受け入れ先に奔走したというエピソードも記録されています。

ついでに昨夜まで恐ろしく残酷な空爆があったのに、それでも「学校」に集まり、先生も親も子どもも再建に力を尽くす。校史が伝える学校にはそんな理屈を越えた力がありました。

戦後70年を迎えた今、安全保障関連法案をめぐる世論がわき上がっています。戦中を必死に生き抜いた子らも、すでに3代、4

代を重ねている年齢。かつて小学校が立地した場所を訪れると街は穏やかな日常の中にあリました。この場所から地獄の戦火を乗り越え、かつての子どもたちは、世界でもまれな70年の平和の日々を積み重ねて来られたのです。



『熊野の廃校』（中島敦司 / 湯崎真梨子著）にも、熊野地域で被弾した小学校のことを書いています。山村の子らも例外ではなく戦争に巻き込まれていました。読んでみてください。

湯崎真梨子(ゆざき まりこ)

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。

プロフィール

